心的作業としての「定位」について
― インタビューと風景構成法による一考察 ―

浅田　恵美子

1. 問題と目的
1.1 定位とは

定位とは，生物学的には「環境空間内で動物が，能動的に，体軸が一定の方向に向くように体の位置をきめることであり，光や音波や重力，あるいは一定の濃度こう配をもった化学刺激などが手がかりとなって起こるもの」（世界大百科事典，2007）を指す。このような定位は，生命体が自らの安定的状態を維持するために発現するものであるが，私たち人間もまた，自分をとりまく環境の中で，自らを安全に，安定的に位置づけようとする行動傾向を持っている。例えばボウルヴィ（1969）の示す発達理論においては，定位行動は，乳児が特定の他者に注視や接近などの行為を行う愛着行動であり，乳児はこの行為によって，養育者たる他者から保護を引き出し，それによって生き延びようとする。そして，このような定位行動は，個体が成熟したあとも維持され，我々の認識や行動に影響を与えるとされる（鹿取，1982）。

このように，生得的な個体保持行動として行われることを本来的な意味とする定位行動であるが，私たちは心的にも，安定状態を維持するために，環境の中に自分を位置づけようとする作業を行っている。この心的な作業において手がかりとなるもの，すなわち，生物が行動としての定位を起こす上での音や光，化学物質といった手がかりと同様のものは，個々が周囲の世界をどうとらえるかという主観的な知覚に訴えかけてくる様々な事象であろう。そこには，「人間が世界に対して取り結ぶ関係について，そして世界が人間に対してどのように現れているのかというありかたについて」（ブランケンブルグ，2003）の概念である，パースペクティブ性が深くかかわってくる。そのような個人のパースペクティブ性が，環境の中に自己を安定的に位置づける作業のあり方を決定づけるといえるだろう。ここで注意しておきたいのは，ブランケンブルグは，パースペクティブ性には人間の実存の「今ここで」というありようが直接表現されるとしているが，その「今ここで」のありようには，「今ここ」にある瞬間的な時間とともに，それを含む「過去ー現在ー未来」の時間の流れというプロセスや，「関係づけられている」状態と「関係づける」動きという能動・受動の両側面が不可分に含みこまれているということである。本論では，特にそのうちの動的な側面，個人の時間とのかかわり方や，自身を世界と関係づけようとする能動的な動きに焦点を当て，それを心的作業としての自身の位置づけ，「定位」と定義する。

このような心的な作業としての定位は，個人が自身の時間や世界をどう構成し，その中でどのように生きていくかにかかわる重要な動きであるといえる。しかし，このようなテーマについての，心理臨床的な側面からの検討はほとんど行われていない。唯一，吉田（2007）が，生得的な適応能

力であるところの定位行動を，心理臨床の場でリソースとして活用することに着目し，「我々の定位行動は，今いるところから別のところへの行動であり，今いるところ（いま・ここ）が行動の基点となる」と指摘して，「いま・ここ」の身体性の回復を主張している。

一方，周囲の環境との安定した結びつきという意味が共通する「居場所」の概念については，特に教育の現場でのいじめや不登校の問題との関連で数多く検討されているほか，心理臨床の分野でも，村瀬ら（2000）などにより心理的支援の観点から検討されている。しかし，「居場所」の概念は，主体にとってはどちらかといえば受動的に「ありのままを受け入れてもらう」場といった意味合いが強いため，主体が能動的に自らを環境の中に位置づける本論の「定位」概念とは違いがある。

1.2 目的

以上のことから，本論では，心的作業としての「定位」を，自身の時間をどうとらえるかという動き，および自身を世界に関係づけようとする能動的な動きと定義し，その包括的なプロセスを明らかにするとともに，その個別性についても検討することを試みる。

1.3 手法の検討

本論では，「定位」の検討に向けて，半構造化面接と風景構成法を用いた調査を行った。半構造化面接は，定位についての意識的な側面をうかがうためのものである。本論における定位の概念を説明した上で，「今生きている世の中に自分をどのように位置づけているかについて，拠り所となるものと，そのやり方について教えてください」という質問のみを行い，その後は協力者の自由な語りに任せた。「拠り所」についての問いは，自身のとらえる世界の中で，主観的にどのような事象を心的な刺激として知覚し，定位の手がかりとしているのかを知るために行った。さらに「そのやり方」という部分で定位の動きについて問うこととした。

一方，風景構成法は，定位についての意識的でない側面をうかがうために施行した。風景構成法は中井久夫によって開発された描画法であり，10 個の項目を順番に描き込んでいくことで，最終的に一つの風景を描くものである。描かれる風景イメージは，実際の風景体験のみならず，私たちが毎日を生きる中での空間体験をも色濃く映し出すと考えられている。本論では，そこに「風景の中の自己像」（皆藤,1994）の概念を導入し，「この風景の中にあなたがいるとしたら，どこにいる，いたい？」「そこであなたは何をしているの？」と尋ねることを試みた。「描画の中にいない」と答えた場合には，さらに，「ではどこにいますか？どこからこの風景を見ていますか？」という質問を加えている。これらは，「投影された内的世界である風景の中に，質問によって描き手がさらに自己像を導入し定位させる」（皆藤,1994）ことを促すものであり，自己像の位置と風景との関係に，定位のありようが投影的に示されるのではないかと考えられた。

2. 方法

2.1 協力者

調査は，男女 16 名の協力を得て行った。本論には，半構造化面接，風景構成法の調査手順をすべて完了した 15 名の結果を示す。協力者の年齢は 25 歳から 60 歳，年代内訳は 20 代，30 代，40 代が各 4 名，50 代 2 名，60 代 1 名，平均年齢は 40.6 歳であった。構成は，男性 7 名・女性 8 名，すべて既婚で，子どもを持つ協力者であった。定位の様相を幅広くとらえるため，なるべく協力者の各年代，男女の人数については均等を心がけたが，一方，あまりに結果が拡散することを避けるた

め，今回は既婚，子どもの有無についての条件は統一して行った。

2.2 手順

調査期間は平成 24 年 3 月～7 月，筆者が単独で，調査協力者 1 人当たり 1 時間から 1 時間半程度の半構造化面接を 1 回実施した。面接は「今生きている世の中に自分をどのように位置づけているかについて，拠り所となるものと，そのやり方について教えてください」という質問のみを行い，その後は協力者の自発性とペースを尊重して進めた。内容は許可を得て IC レコーダーに録音し，逐語録を作成した。協力者には，事前に研究の趣旨や内容を説明し，個人情報は保護されること，描画を含む調査の中止や拒否は自由であることを約束している。

面接の中では，インタビューの前に風景構成法を施行し，描画後に PDI を実施した。季節，天候といった通常の質問に加え，「もしも，この風景の中にあなたがいるとしたら，どこにいますか，いたいですか。また，描いた人がそうなら，そのようにお答えください。」と尋ねた。「いない」と答えた場合には，さらに「では，あなたはどこにいますか？どこからこの風景を見ていますか？」という質問を加えた。これらの質問は，描画後にその中に自身を投影するという心的作業の侵襲性を考慮し，協力者の様子を慎重に観察した上で行った。

2.3 分析方法

2.3.1 分析の流れ

本論文は，まず包括的な視点から，定位のプロセスがいかなるものであるかという様相をとらえ，さらにそれが個々人においてどのように行われるかについての検討を行うものである。そのため，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，「M-GTA」という）によって面接で得られた語りのデータを分析し，定位のプロセスについての全体像を描き出した上で，事例を用いて LMT を加味した分析を行い，定位のプロセスの個別性についても考察した。

2.3.2 言語データによるカテゴリー化

半構造化面接によって得られた語りの逐語をテキストデータとし， M-GTA を用いて分析した。M-GTA は，「データに反映されている人間の認識，行為，感情」（木下, 1999）を丁寧に検討する独自のコーディング方法を用いることで，データに密着した分析を進める手法である。認識や感情の動きのプロセスを描き出すことを特徴とすることから，個々人が自分をとりまく環境に自身を定位していくプロセスを読み解くことを目的とする本論の分析において適当と考えられた。M-GTA の方法に従い，本論では「定位がなされるプロセス」を分析テーマとした。

具体的な分析は，以下のような流れで行った。①分析テーマに照らして，データの関連箇所に着目し，それを一つの具体例（ヴァリエーション）としつつ，かつ他の類似具体例をも説明できると考えられる説明概念を生成した。②分析ワークシートを作成し，概念名，定義，最初の具体例などを記入した。③分析を進めつつ新たな概念を生成し，分析ワークシートを個々に作成した。④同時進行で，他の具体例をデータから探し，具体例が豊富に出なければ，その概念は有効ではないと判断した。⑤生成した概念については，対極例についても比較の観点からデータをみていくことにより，解釈が恣意的に偏る危険を防いだ。その結果をワークシートの理論的メモ欄に記入した。11 名分の分析が終了した時点で新たな概念の生成がなくなり，理論的飽和に達したと判断したが，類似例と対極例の検証およびヴァリエーション欄の充実のため，分析は 15 名分のデータまで行った。⑥生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討した。⑦複数の概念からなるカテゴリー

を生成し，その相互の関係から分析結果をまとめ，ストーリーラインと概念関係図を作成した。

概念の生成プロセスを説明するため，本論で作成した分析ワークシートの一例を表 1 として示す。

表 1. 分析ワークシート例

概念 1	家族を支点とする
定義	家族という単位や，パートナー，子どもを自分を支えてくれるものとする
ヴァリエーション	・家族との関係は，一番先にあるもの。だから，いつも確認して，自分と結び直していく。 (No.1) ・子どもが生まれて，より家族が拠り所に。一人だけのことはあまり関係ない。(No.13) ・家族のためにやっている，何もかも。だからやれるんだとも思う。(No.15) ・奥さんと協調しあって，家族が基本でやっていく。それが結びつき方。(No.10) ・知らぬ間に，相手とは団結している感じがある。一緒に家庭を動かしている同志。(No.4) ・つながっていないでもない，すごく濃い関係というのでもない。でもやっぱり旦那との関係が基本の単位になっていると感じることが多い。(No.8) ・子どもに愛されていると思うと元気になる。自分が持っている愛情より深いと思う。(No.8) ・母親として，○○の母ですっていうふうに，自分のことを一番に思う。(No.2)
理論的メモ	・配偶者，子どもに対する思いを含めるのかどうか。個々に対しては別の思いがあるのではないか。 ・「家族」の単位で考えることはどういう意味を持つのか。 ・家族のためというベースに自分の仕事や趣味が乗っている。それをどう考えるか。 ・そこから広がっていく関係については別物か？

分析テーマに照らして，「家族との関係は，一番先にあるもの。だから，いつも確認して，自分と結び直していく。」という語りに着目し，これを，家族を自分の支えとすることと捉え，概念「家族を基盤とする」を生成した。他のデータから，「家族のためにやっている，なにもかも。だからやれるんだとも思う。」などの類似例が複数見いだされたため，概念としての採用を決め，定義を検討した。同様にして他の概念を生成し，その過程で浮かんだアイディアや対極例についての思考を理論的メモ欄に記載しながら進めた。

2.3.3 風景構成法を加えての事例における検討

M-GTA によって抽出されたカテゴリーを基に，各協力者のデータに戻り，カテゴリーの分布に特徴的な傾向を持つ事例について，語りの内容に風景構成法を加えた質的な検討を行った。風景構成法の分析については，風景の中の自己像の位置，全体の描かれ方という観点を中心とした。

3. 結果と考察

3.1 言語データの分析—M-GTA の各概念とカテゴリーについて

分析の結果，11 の概念が生成され，それらの関係を検討し，4 つのカテゴリーを生成した（表 2）。

以下，各カテゴリーの特徴について記述する。

3.1.1 カテゴリー「時間の中で位置づける」

「時間の中で位置づける」は，「未来による牽引」「いまの時間につながる」「自分の歴史の確認」という 3 つの概念を含む。

「未来による牽引」は，「いつかぜったい住みたい場所がある。必要なものはこれだけという理想の場所」「子どもに尊敬される父親になりたい。それが何より，一番の目標」というように，自分にとってのありたい姿，いつかは行きたい場所といった，理想や憧れを拠り所として，よりよく生きる未来へと自身を方向づけていく動きを示す概念である。

「いまの時間につながる」は，「子どもといる時間が一番大事。そのための今」「子ども，家族，

大事なすべてに対して，するべきことをするための時間が大切」，「自分の趣味に没頭したり，ぼんやりしたり，リフレッシュする時間を作る」というように，時間そのものに価値を感じるというよりは，大切な人と過ごす，すべきことをする，リフレッシュするといった，なにかを大事にするための手立てとして時間とつながり，いまという瞬間の中に自分を位置づける動きが示されている。

「自分の歴史の確認」は，「今までの 40 数年をどう生きてきたかが大事。今までがあっての今。でも，積み重なってというよりは，今までもちゃんとあって，今もある。自分の今を感じてるみたいな」「人と深くつきあえる自分になってきたなと思う。それが自分を落ち着かせる」というように，過去からの時間の流れの上に成り立つ現在のアイデンティティや，今現在まで自分がどう歩んできたかという変化のプロセスに手応えを感じる概念である。

このように，「時間の中で位置づける」というカテゴリーは，理想や憧れに牽引されて，より良い未来の自分へ向かう，あるいは過去からの時間の流れの中で形作られてきた自身のアイデンティティや成り立ちに手応えを感じるというように，時間の軸の中で自身を確認し，位置づける動きを示している。またそこに，大事なものを大事にするために，いま現在という時間の中に自身を位置づけるという動きも含まれている。

3.1.2　カテゴリー「自分の核を持つ」

「自分の核を持つ」は，「信条を実行する」，「信念，価値観を持つ」の 2 つの概念からなるカテゴリーである。

「信条を実行する」は，「天才も一握りはいる。でも，一握り以外の人にも，なにかはできると信じること」「できる限り，毎日楽しく暮らせるようにはしてるかなぁ」というように，自分なりの悟り，哲学といったものに基づいて行動を選択することを示す概念である。内面の信条に照らして方向性を確認しつつ，自分の位置を調整していく動きを示しているといえる。

「信念，価値観を持つ」には，「芸術が核になってる。芸術で人を幸せにするっていうことを常に考えている」「一番大事なのは，感性を錆びさせないこと。停滞することが一番怖い」というように，強い求心力をもつ信念や価値観を自分の中心において，生き方を定めようとする動きが示されている。これらの信念や価値観は，簡単に変わるものではなく，過去から将来にかけて，確固として自身の中にあるものとして捉えられている。

このように，「自分の核を持つ」というカテゴリーは，自身の基盤となる信念や価値といった，不変の重要性を確かめつつ，あるいは自分なりの悟りや哲学といった信条に添いつつ，自分の方向性を調整していく動きを示している。

3.1.3　カテゴリー「支点を確認する」

「支点を確認する」は，「家族を支点とする」，「居場所の確認」，「生活の営みへの愛着」という 3 つの概念からなるカテゴリーである。

「家族を支点とする」は，家族やその成員を自身が生きていく支えととらえる概念である。「家族のためにやっている，何もかも。だからやれるんだとも思う」と，家族という単位を生きていく上での自分の支えとしたり，「知らぬ間に，相手とは団結している感じがある。一緒に家庭を動かしている同志」と，伴走している配偶者との関係の中で生まれる安心感や，連帯感を拠り所としたり，また，「子どもに愛されていると思うと，元気になる。自分が持っている愛情より深いと思う」と，子どもとの関係を活力としたりする動きが含まれる。また，「居場所の確認」は，「友人も家族も居

表 2. カテゴリーの定義と具体例

カテゴリー	概念名	定義	数	具体例
時間の中で位置づける	未来による牽引	理想，憧れなどよりよい自分としての未来に惹きつけられる動き	7	いつかぜったい住みたい場所がある。必要なものはこれだけという理想の場所。(No.6) 子どもに尊敬される父親になりたい。それが何より，一番の目標かもしれない。(No.3) 料理上手で，いつも「おかえり！」って明るく家族を迎えられるような…そんな存在になりたい。憧れだけど，手に入れたいこと。(No.4)
	いまの時間につながる	いま現在の時間を大事にする	8	子どもといる時間が一番大事。そのための今，後からはどうしようもない。(No.7) 家族との時間自体は短い。でもお弁当作ったり，洗濯しながら，今頃どうしてるかな，今日はいっぱい食べたかな，そう思いめぐらす時間が拠り所かも。(No.13) 自分の趣味に没頭したり，ぼんやりしたり，リフレッシュする時間を作るように。(No.10) その時その時のキラキラした時間が楽しかったら，それがすべて。人とも家族とも。(No.12) 子ども，家族，大事なすべてに対して，するべきことをするための時間が大切。(No.15)
	自分の歴史の確認	自分の歴史，アイデンティティの変化に手応えを感じる	10	周りに人がいる場でこそ，自分の存在が生きるんやなとずっと思ってきた。(No.11) 今までの40数年をどう生きてきたかが大事。今までがあっての今。でも，積み重なってというよりは，今までもちゃんとあって，今もある。自分の今を感じてるみたいな。(No.14) 人と深くつきあえる自分になってきたなと思う。それが自分を落ち着かせる。(No.4)
自分の核を持つ	信条を実行する	自分なりの考え，哲学を大事にして行動する	1	子どもに見せられるのは，仕事じゃない。家庭の中で，どういう存在でいるかが大事。(No.3) 天才も一握りはいる。でも，一握り以外の人にも，なにかはできると信じること。(No.2) できる限り，毎日楽しく暮らせるようにはしてるかなぁ。(No.4) 子どものことがあって，社会にかかわっていくということの大事さがわかった。今の自分にとっては，そのことを通じて，幸せを実現するという姿勢が芯になってるかも。(No.7)
	信念，価値観を持つ	核となる強い信念，価値観を持つ	7	芸術が核になってる。芸術で人を幸せにするっていうことを常に考えている。(No.2) 音楽が好きで，音楽で自分をわかってもらいたいという思いは信念かな。(No.3) 一番大事なのは，感性を錆びさせないこと。停滞することが一番怖い。(No.8) 一人で生まれて死んでいくっていうのはある。すべての人は孤独やと思う。(No.1)
支点を確認する	家族を支点とする	家族という単位や，パートナー，子どもを自分を支えてくれるものとする	17	子どもが生まれて，より家族が拠り所に。一人だけのことはあまり関係ない。(No.13) 家族のためにやっている，何もかも。だからやれるんだとも思う。(No.15) 奥さんと協調しあって，家族が基本でやっていく。それが結びつき方。(No.10) 知らぬ間に，相手とは団結している感じがある。一緒に家庭を動かしている同志。(No.4) やっぱり旦那との関係が基本の単位になっていると感じることが多い。(No.8) 子どもに愛されていると思うと元気になる。自分が持っている愛情より深いと思う。(No.8) 母親として，○○の母ですっていうふうに，自分のことを一番に思う。(No.2)
	居場所の確認	自分の価値がある，認めてもらっている場所があると感じる	5	友人も家族も居場所，自然も居場所。自分を認めてもらっている感覚のある場所。それで自分の存在を確認するところがある。(No.7) 会社，友達との飲み会，家族とか…自分がそこにいて落ち着くし，向こうもそうで，いる事が価値になっている場所があることかな。(No.1) 自分が家族の役に立っていると実感できる場所が支え。やっぱり居場所？(No.15)
	生活の営みへの愛着	生活の営みを支えるものに愛着を持つ	6	自転車。子どもを乗せるのに，ないと生活困るし，リズムがとれへん。気に入ってるし。(No.5) ホームベーカリー。毎朝，長男が必ずブドウパンを食べたがるから…絶対必要。(No.5) 包丁とバスケットシューズ。仕事で不可欠なものと，趣味でとても大事なもの。(No.9) 石とか宇宙が好き。広がっていって描ききれないようなもので気持ちを晴らす。(No.10)
外に開かれていく	支点から広がっていく	支点から関係や行動を展開していく	8	家族との小さい結ばれがあって，そこから全てが始まってつながってる。(No.14) 家族を通して世の中につながっている感覚がある。(No.2) 子どもを通じて自分自身の世界が広がっている。好きなもの，友達，遊び。(No.5) 子どものことがあって，社会のことを考えてきた。生まれる前とは180°変わった。(No.7) 自分がやっている仕事はすごく好き。そこにも小さな結ばれがあるし，そこからいろいろなことが広がっていく。(No.14)
	仕事に意味を見出す	仕事に対する思い，意味を感じる	7	好きなことが仕事，それしかない。基本はそれが中心で，やるのが当たり前。(No.1) 仕事は，自分と社会を橋渡ししてくれているもの。(No.7) 好きだからという理由で今の仕事をしている。はっきりしていて，迷いはない。(No.11)
	人との関係に開かれる	人との関係を大事にし，維持していく	10	コミュニケーションを重視して生きてる。つながりそのものが拠り所。(No.3) 人と会ったり，しゃべったりするのが好きやから，それはすごく大切な要素かな。(No.4) やっぱり大事と思うのは人かなぁ。友達はすごく大事。(No.12) 大切な人たちがいるということが支えてくれてると思うことが多いね。(No.11)

場所，自然も居場所。自分を認めてもらっている感覚のある場所」「自分がそこにいて落ち着くし，向こうもそうで，いる事が価値になっている場所があることかな」というように，自分にとって安心感をもたらすだけでなく，自身の存在意義を感じられる場を確認していく動きを示す。

「生活の営みへの愛着」は，「ホームベーカリー。毎日，長男が必ずブドウパンを食べたがるから…絶対必要」「包丁とバスケットシューズ。仕事で不可欠なものと，趣味でとても大事なもの」というように，必需品としての物そのものへの愛着を示す概念である。毎朝子どもの好きなパンを焼いて食べさせるといった，生活のリズムをとり，家族の暮らしを潤わせるために必要な生活用品，あるいは，仕事に欠かせない体に馴染んだ道具や，趣味において自分を発揮させてくれる用具のようなものへの愛着を示す。日々の生活の営みと不可分な，暮らしを形作り，彩るものに愛着を持つことには，生活そのものを愛しむ動きが示されている。

このように，「自分の支点を確認する」は，自分の外側ではあるが，すぐ近くにあって自分を支えてくれるもの，それなしには自分の世界が成り立たないようなものを生きる支点として確認し，そこから自身の位置を定めようとする動きを示すカテゴリーである。

3.1.4　カテゴリー「外に開いていく」

「外に開いていく」は，「支点から広げていく」「仕事に意味を見出す」「人との関係に開かれる」という 3 つの概念からなるカテゴリーである。

「支点から広げていく」は，「家族との小さい結ばれがあって，そこから全てが始まってつながってる」，「子どものことがあって，社会のことを考えてきた。」というように，自身にとっての支点を端緒として，自分が変化したり，新しい世界を開いていくといった展開の動きを示す概念である。

「仕事に意味を見出す」は，「好きだからという理由で今の仕事をしている。はっきりしていて，迷いはない」「仕事は，自分と社会を橋渡ししてくれているもの」というように，自分にとっての仕事の意味を確認する動きを示す。仕事に，生活の糧を得るという以上の意味を見出すことが，自分を位置づけることにつながっている。

「人とのつながりへの関与」は，「コミュニケーションを重視して生きてる。つながりそのものが拠り所」「人と会ったり，しゃべったりするのが好きやから，それはすごく大切な要素かな」というように，自分が人とのつながりの中にあることを見出し，そのつながりを維持していくという，自分をとりまく人間関係へ関与していく姿勢を示す概念である。

この「外に開いていく」というカテゴリーでは，仕事や家族以外の他人との人間関係など，外側にある世界，社会における役割や人間関係の中に，自身を向けていこうとする動きが示されている。

3.1.5　定位のプロセス

４つのカテゴリーの関係を描き出したものが図 1.「定位のプロセス」である。

そのプロセスは以下のように説明できる。「自分の核を持つ」ことによる定位は，自身の確固とした信念や価値観を中心に据え，信条といった自分なりの方向性を行動の指針として，常に自身の内部を参照しつつ行われるものである。この「自分の核を持つ」ことが芯となり，そこから，支えとなる家族という単位や，さまざまな居場所，生活の営みへの愛着といった，自身に近い「支点を確認する」定位の動きが広がっていく。これは，自身以外のものを支点として確認し，それとの関係によって，位置を決めようとする動きであると思われる。さらに，支点から派生し，展開していく動きとして，仕事や，家族の単位を超えたより広い人間関係といった社会とのかかわりにつながる

のが，「外側に開いていく」定位のカテゴリーである。

また一方で，時間のプロセスの中で自身を位置づけていく「時間の中で位置づける」定位の動きがある。理想や憧れを手がかりに，現在から未来へ向けて自身を定位する「未来による牽引」の動き，過去から現在への過程の中で培われたアイデンティティを確かめ，自分の変化のプロセスに手応えを感じる「自分の歴史の確認」である。さらには，いま現在の時間の中で自分にとって重要なものを確かめる「いまの時間につながる」定位の動きがある。

このように，定位のプロセスには，個としての自分の内面とのかかわりである「自分の核を持つ」を中心に，自身と周囲との「支点を確認する」動きへ，さらに広い世界とのかかわりとして「外側に開いていく」動きへという広がりの軸と，過去と現在，現在と未来という「時間の中で位置づける」動きという，時間の軸が含まれている。広がりの軸は，いま現在という時間の中で展開される水平な動き，時間の軸は，過去から未来への流れの中で，いま現在を貫く垂直な動きであるといえるかもしれない。

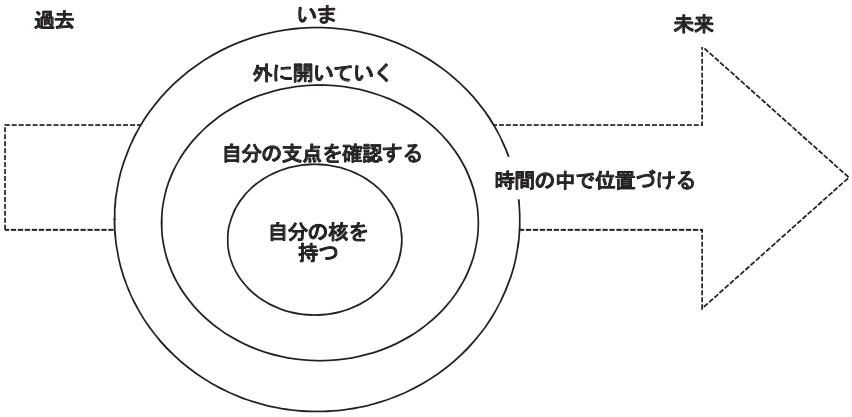

図 1. 定位のプロセス

3.2 風景構成法を加味しての事例の検討

ここでデータに戻り，個々の協力者の定位の動きが，どのカテゴリーに多く含まれるかについての検討を行うと，各々の特徴的な傾向が浮かび上がってきた。その中でも，特にカテゴリー分布において違いの見られる 2 事例を選び，風景構成法作品を加えての質的な検討を行うことによって，定位の独自性を考察することを試みる。

3.2.1 事例 A【25 歳，女性】

語りデータから：分布としては，「時間の中で位置づける」（以下，C-1 と示す）が 1 個，「自分の核を持つ」（以下，C-2）6 個，「支点を確認する」（以下，C-3）1 個，「外に開いていく」（以下，C-4）5 個，となっており，C-2 と C-4 がほぼ同数で多く，C-1 と C-3 は非常に少ない。

それぞれのカテゴリーの例を示す。C-1：「周りに人がいる場でこそ，自分の存在が生きるんやなとずっと思ってきた」 C-2：「人の気持ちを考えることが大事な自分がいる」「人が悲しむことが怖い。好きだから悲しい思いをしてほしくないといつも思っている」「自分だけでは不安。役に立つこと，頼られることが自分の力だと思う」「周りに人がいてこそ，自分の存在がある」C-3：「家族がい

たから，今の自分になれた」C-4：「好きだからという理由で今の仕事をしている。はっきりしていて，迷いはない」「仕事では，やりたいことができていることが幸せ」「これまで出会って来た人，周りにいた人との関係が大事」。「大切な人たちがいるということが支えてくれてると思うことが多いね」。C-2 の「周りに人がいてこそ，自分の存在がある」については，「特定の誰かではなくて，みんなが同じようにふわっと自分の周りにいる感じ。特別に誰が近い，誰が遠いというのではなくて，みんなが同じ円の中にいるような感覚をもっている」とさらに詳しく語られている。

図 2. 事例 A の LMT

風景構成法について（PDI より）：静かな田舎。川の音や鳥の声が聞こえる，あまり人のいない場所。初夏の午前中で，まだ涼しいけど，いいお天気。お母さんと女の子が花の近くにいる。自分はこの絵の中にはいないが，風景の中，手前の小高い丘にいて，全部を見ている。行こうと思えば道のところに下りていける。そこで花を見ていたい。

語りのデータから，A にとっての定位は，主に自身の内面の確認と，それを外に開いていくという動きの中で行われていることがうかがえる。現在の価値観や信条を確認することが，仕事への姿勢につながり，人間関係のありかたにも反映されているようだ。目を引くのは，自身の内面の確認が常に人とのかかわりに触れつつ行われているということである。仕事への思いについては非常に明確に語られるが，周囲の人の存在やその関係の重要さについては，そこに支えを求めるというよりは，その中で自分がどうあるかという確認へ回帰していくという点が特徴的であった。

一方，風景構成法において非常に印象的であるのは，項目同士がほとんどつながっておらず，それぞれが空間に浮かんでいるように描かれていることである。HTP と花について枠線を基底線として関係づけられているように見えるものの，奥行きや立体の表現はなく，大景群と道は，直接的な関係づけではなく，配置によって風景を構成している。そして，A の自己像も，この風景からは離れたところにいて，全部を眺めているという。これは，A の「みんなが同じように，ふわっと自分の周りにいる感じ。…特別に誰が近い，誰が遠いというのではなくて，みんなが同じ円の中にいるような感覚」という語りに通じ，周囲との関係の中で自分を確かめる定位の動きともつながっているように思われる。A にとって，周囲の人やものごとは，自分をとりまくふわっとした円の中に，混沌のままに，整合性を持たずに位置しているかのようである。風景構成法に表出される「自我－心理空間軸の心の働き」（角野, 2006）として考えれば，A の自我の働きは，整合的でつながった心理的空間を構成することよりも，事物が個々に適度な距離を保った空間を構成することに重心を置いているといえる。「彩色されない部分は，混沌の残存部分である」（中井,1992）とすれば，空白部分が多く残されていることからは，自分を取り囲む世界を混沌のままに受け入れ，それを追放する

ことを必要としないAの定位のありかたがうかがえるといえるのではないだろうか。

3.2.2 事例B【42歳，女性】

語りデータから：「時間の中で位置づける」（以下，C-1と示す）が4個，「自分の核を持つ」（以下，C-2）4個，「支点を確認する」（以下，C-3）5個，「外に開いていく」（以下，C-4）4個，となっており，それぞれのカテゴリーに万遍なく分布している。

それぞれのカテゴリーの例を示す。C-1：「料理上手で，いつも『おかえり！』って明るく家族を迎えられるような…そんな存在になりたい」「人と深くつきあえる自分になってきたなと思う。それが自分を落ち着かせる」C-2：「お金にこだわらず，みんなで幸せにやっていきたいと思う」「できる限り，毎日楽しく暮らせるようにはしてるかな」C-3：「家族が一番の元気の素かも」「知らぬ間に，相手とは団結している感じがある。一緒に家庭を動かしている同志」C-4：「この年になっても，友達が増えていくことが嬉しいかなぁ。子どものお蔭やな」「人と会ったり，しゃべったりするのが好きやから，それはすごく大切な要素かな」。

風景構成法について（PDIより）：家族の物語。お父さん，お母さん，男の子，女の子がいる。自分はこのお母さん。気持ちいい，のんびりしている場所だけど，ここに住んでいる感じでもない。友達の住んでいるところに訪ねて来ていて，これから魚と野菜をごちそうしてもらう。風景では滝がポイントで，とても好きだし，心が洗われる。

図3. 事例BのLMT

語りのデータは，いずれのカテゴリーにもほぼ同数分布しており，Bの定位の動きが多方面にわたるものであることを示している。過去からの自分の変化に手応えを感じつつ，さらに将来的な理想を求めるというように，時間軸の中に自分を位置づける動きがある一方，自分の信条に添った生き方を中心に，家族や生活の営みを支えとしながら，人間関係の中に開かれていくというように，定位の資源は多様で豊かである。そして，Bに特徴的であるのは，どのカテゴリーに属する語りにも，その定位の動きが人とのかかわりを伏線的に備えていることである。人や家族とかかわりを通して，Bは自分の核を持ち，支点を確認しつつ，社会との関係を広げていく。時間の中で自分を振り返るのも，将来に対して持つ憧れにも，人とのかかわりが示されている。

また，風景構成法に描かれているのも家族の物語である。穏やかな田舎の景色の中で，子どもたちが川遊びをし，両親がそれを見守る穏やかな光景が，前面に近景として描かれ，家族が友人を訪ねているという設定の中に，隠れた人間関係の重なりがさらに示されている。上流の滝の水しぶき，煙突からなびく煙，泳ぐ子どもたち，父親の連れている犬の足取りなど，多くの動きが描かれていることも特徴的であろう。鬼丸（1981）は，児童画における造形の原理として，「遠視」と「近視」

という視点を示し，遠視が全体視で視覚的であるのに対し，近視は部分視で触覚的，運動を伴うものとしている。B の描く風景はまさに近視的であり，動的な描写が，絵に生き生きとした弾みを与え，体感的な刺激を感じさせるものとなっている。Bの自己像が，描かれた人物と重なり，風景の中にある動きや体感を引き受ける存在となっていることからも，B にとっての世界が，生き生きとした実感を伴った豊かなものとして形作られていることがうかがえる。B の定位のありかたは，人とのかかわりを背景に，多様な資源を用いて自身を位置づけるものであると考えられよう。

4. 総合考察

4.1 定位の個別性と共通性

ここまで，語りによる M-GTA の分析と風景構成法を手掛かりに，定位の包括的なプロセスと，その個別性についての検討を行ってきた。

個々の定位のありかたの根本に，それぞれのもつ人格特徴，傾向といったものがあり，個々の育った環境，生きてきた歴史，また現在の環境や状況などの要因が深くかかわっていることは当然であろう。そのような個別性はそのままに反映され，多様な定位のありかたが示される。

しかし一方で，本論に示されたように，その個別性を超えて，定位のありかたにはやはり一定の共通項が見出される。そのことは，生を支える価値に対する私たちの見方に，共通の基盤が存在しているということを意味している。それは，個々の内面に存在する価値観や，それぞれの生活の営み，人との関係性，社会的な役割を尊重しようとする意識であろう。さらに，最も大きな共通基盤は，私たちがみな，未来へと進む時間の流れの中に，ともに存在しているという認識ではないだろうか。そのような共通基盤が，私たちそれぞれの定位を可能にしていると思われる。

4.2 手法の妥当性

本論では，M-GTA による分析から，定位の動きにおける共通のカテゴリーと，プロセスの全体像が明らかになった。また，風景構成法における投影的な自己像定位の試みからは，カテゴリー分布に示された個人の特徴に重なるものだけでなく，語りの示す定位のありかたを補足し，深める解釈が導かれたといえる。中井（1992）が，風景構成法は「人生においては既存のものの判読 decipherment ではなくて計画 planning に関係している」とするように，この手法が多様性を基礎とし，相対的・縦断的な解釈を求めるものであるという点において，風景構成法はプロセスを描き出す手法としての M-GTA になじむといえるのかもしれない。また逆に，「風景構成法で描かれる構成的心理空間がすべての心理空間を尽くしているものではない，しかも構成的心理空間と対照的な投影的心理空間を加えても，すべての心理空間を尽くすものではない」（中井,1971）という限界を補うものとして，M-GTA の言語データを用いることには，一つの意義があったといえよう。

5. 今後の課題

本論には多くの課題が残されている。定位のありかたは，前述のように，個々の人生の多様な主観的体験や，その背景としての周囲の環境，社会，文化とも複雑に絡み合うものである。それらとの関係を踏まえつつ検討していくためには，まずは社会，文化といったものがもたらす差異を明らかにするための，横断的，量的な調査を考える必要があろう。また一方で，個人の定位のありかたが，年齢，性別，職業，家庭環境などによって変化していくことを考えれば，それらの状況を背景

とした上で，人生を包括的にとらえるような，細かな聴き取りを縦断的に行っていくことも必要であると思われる。そのような横断的，縦断的な結果を，本論において明らかになった定位のプロセスの枠組みと照らし合わせることで，定位のありかたの独自性と共通性はようやく明確になるといえよう。

また，風景構成法の扱いにおいても，今回のような質的な検討から得るものを重要としつつも，そこにとどまるのではなく，サンプル数を増やし，描画における人物像の定位の投影的なありかたをさらに検討していくことが必要であろうと思われる。

【付記】研究を進めるにあたり，ご指導を賜りました皆藤章教授と，調査に応じてくださった協力者の方々に深く感謝いたします。本論は，住友生命「未来を築く子育てプロジェクト・女性研究者への支援」による助成を得て行いました。

＜引用・参考文献＞

Blankenburg, W.編（1991）: Wahn und Perspektivität Störungen im Realitätsbezug des Munschen und ihre Therapie　Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart 山岸洋，野間俊一，和田信訳（2003）妄想とパースペクティブ性ー認識の監獄ー　学樹書院

Bowlby, J.（1969/1982）: Attachment and loss　Vol.1.Attachment　New York　Basic Books　黒田実郎他訳（1976）　母子関係の理論 1　愛着行動　岩崎学術出版社

加藤周一編（2007）: 改定新版世界大百科事典　平凡社

鹿取廣人（1982）: 知覚・認知の働き—その発生と展開—　講座現代の心理学 3 人間の成長　小学館

角野善宏（2006）: 統合失調症の回復過程と風景構成法との関連性　箱庭療法学研究 19（2）　19-34

皆藤章（1994）: 風景構成法—その基礎と実践—　誠信書房

木下康仁（2003）: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い　弘文堂

村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文（2000）: 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ —通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因—　心理臨床学研究 18 221-232.

中井久夫（1971）: 描画を通してみた精神障害 特に精神分裂描写における心理的空間の構造　芸術療法 3 37-51

中井久夫（1992）: 風景構成法　精神科学治療 7（3）　237-248

鬼丸吉弘（1981）: 児童画のロゴス—身体性と視覚—　勁草書房

吉田俊治（2007）: 心理臨床における「定位」—呼吸法を利用した定位過程の検討—　学生相談臨床—京都文教大学学生相談室報告書—第 3 号 3-12

（心理臨床学講座　博士後期課程 3 回生）

（受稿 2013 年 9 月 2 日、改稿 2013 年 11 月 28 日、受理 2014 年 1 月 16 日）

About the Process of "Localization" as a Mental Work: A Study by Landscape Montage Technique and Interview

ASADA Emiko

The purpose of this study is to clarify the comprehensive process of psychological "localization" and also to consider its individuality. "Localization" is defined so as to set a stable position for oneself in the world of each individual. Data were collected through semi-structured interviews and the landscape montage technique by fifteen subjects consisting of men and women. Their reports were analyzed through the modified grounded theory approach. The processes could be divided into four large categories, which are "to position oneself in the relationship with time," "to keep one's own core belief," "to make sure of the supporting points," and "to open to the outside." An examination of these categories showed two movements "localization" in parallel. One is where "to keep one's own core belief," "to make sure of the supporting points," and "to open to the outside" spread further to the outside concentrically, and the other is "to position oneself in the relationship with time," which is depicted as movement along the axis of time. Moreover, by adding further analysis of the landscape montage technique, it shows that the individuality of "localization" is indicated by the diversity influenced by the personality and characteristics of each. To shape the actual process of "localization," which has deep involvement of individual factors, future studies must take a cross-cutting and longitudinal viewpoint.